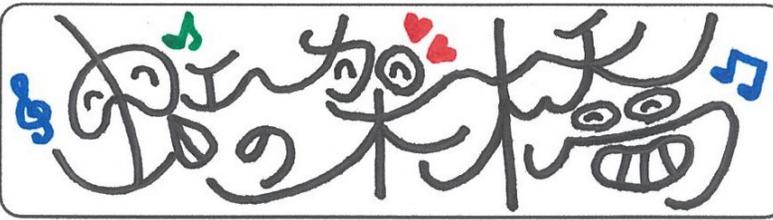


今月の題字

栗田久美さん

(みどり市大間々町)

いつも素敵なお顔を栗田さんは笑いヨガとピアノ教室を通じて笑顔の輪を広げる活動を続け、三方良しの会の会員として地域づくりの活動にも参加しています。

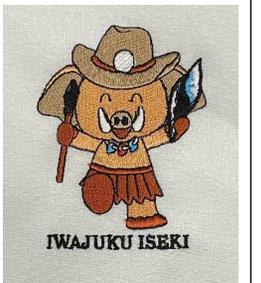


能登半島地震復興支援  
みどり市義援金付ポロ販売中!

足利屋では、今年も義援金付チャリティクールビズポロシャツの販売を開始しました。2011年、東日本大震災の被災地に義援金を送ろうという目的ではじまった企画は今年で14回目。毎年、みどり市の新採用職員からシンボルマークのアイデアを募集して、それをポロシャツに刺繍して、市の職員だけではなく、一般市民にも呼び掛け、クールビズポロとして着用しています。



今年のデザインは、日本の旧石器時代の歴史を塗り変えた『岩宿の発見』の著者・相沢忠洋さんが収集した貴重な資料3万9370点が国の登録有形文化財に指定されたことを祝い、黒曜石の槍先型尖頭器を発見して喜ぶみどモスの姿を胸に刺繍し、袖に「祝文化財登録!!」という文字も刺繍されています。



ポロシャツは速乾性に優れた涼感ドライタイプ。色はホワイト、ネイビー、ライトピンク、ライトパープル、ダークグレーの5色。サイズは男女兼用でSから2Lまでが税込1800円。(3Lから5Lまでは税込2000円)。ポロシャツ代金のうち300円が能登半島地震で被災された方々への義援金として送られます。被災地支援とクールビズを兼ねたポロシャツは、足利屋とさくらもーるのアスクでも販売中です。「みどモス」は、岩宿時代に生息したマンモスをイメージして「みどり市のマンモス」から命名しました。

いのちより大切なもの



いい話  
(文責・靖)  
《347》

小耳にはさんだ

富弘美術館の館長で、星野富弘さんとは旧東村の果(ひのこ)小学校からの幼馴染でもあった聖生(せいりゆう)清重さんに母校の桐生高校同窓会みどり支部で講演をしていただきました。聖生さんは「小学校から高校までの多感な時期に、故郷の山々や渡良瀬川などの豊かな自然の中で遊び、高校時代は登山に夢中になっていた体験が富弘さんの作品のベースになっています」と説明してくれました。富弘さんは群馬大学を卒業

後、倉賀野中学校の体育教師になったばかりの六月十七日、部活の指導中のけがで首から下が全く動かなくなり、それまでの生活が一変しました。群大病院に入院中の富弘さんは毎日「チキシヨ、チキシヨ」と言っていたそうです。そんな富弘さんの心を癒してくれたのは九年間毎日、病院に付き添っていたお母さんの献身的な愛情と奥様となった昌子さんとの出会いや聖書との出会いであり、苦しみを乗り越えて「星野富弘の世界」が出来上がったのでした。富弘さんは著書『いのちより大切なもの』の中で、「けがをして、もう一生首から下を動かすこ

とができないのだとわかってきた時『俺はもう生きていく価値がない』と思いましたが、夜は『次の朝には死んでいたらいいの』と思いつつ寝るのですが、いつもどおりの朝が来て、看護師さんが脈や血圧を測ると正常値なのです。その時、『いのちというものは、俺とは別にあるんだ。俺がいくら生きることをあきらめても、いのちは一生懸命生きようとしていくのだ』と思いました。私の努力でいのちがあるのではなく、『いのちが一生懸命俺を生かしてく

れている』と気づいたのです。私だけが『死』と枕を並べて寝ているような時期もありました。でも、いのちが与えられて、今、いのちが与えられている。死ぬという仕事を与えられないまで『生きるという仕事』をしつかりさせていたのだと思います。富弘さんの本の中で『いのちより大切なもの』が一番売れています。と聖生さんに聞き、「いのちより大切なもの」とは何かを考えています。



世界一小さな  
定利屋  
トイレ美術館



今月の詩画 《347》  
星野富弘さん 『結婚指輪』

今から二十数年前、富弘美術館で富弘さんの代表作をリトグラフにして限定百枚をつくることになり、そのうちの『結婚指輪』(あくあじさい)の一枚を分けてもらい家宝にしています。「結婚指輪はいらぬといふ朝、顔を洗うとき 私の顔をきずつけないように 体を持ち上げる時 私が痛くないように 結婚指輪はいらぬといふ朝、今、レースのカーテンをつきぬけてくる朝陽の中で 私の許に来たあなたが洗面器から冷たい水をすくっている。その十本の指先から 金よりも銀よりも美しい雫が落ちていく」富弘さんの最高傑作です。

靖ちゃん日記

令和六年六月二十一日(金)  
富弘美術館で星野富弘さんのお別れの会が開かれた。みどり市長、群馬県知事、友人代表として富弘美術館を囲む会千葉県支部長で群馬大学時代の親友の渡辺護さんのお別れの言葉を述べた。「星野、よく頑張ったな、ありがとう」という言葉に涙が溢れてしまった。仙台支部、愛知県支部、徳島県支部、宮崎県支部の支部長さん達と再会。富弘さんが世に知られるきっかけとなった「愛・深・淵」の編集者の山崎園子さんと十三年ぶりに再会した。富弘さんのお蔭で多くの人たちと知り合い、再会できたことに感謝した。生前、富弘さんの家に行くといつもダジャレや親父ギャグで笑めされた。富弘さんの詩画に「メン類」があった。「フジんが好き、そばが好き、ラーメンも好き、麺類は何でも好き。そんなわけでシクラーメンも好き」。メン類好きの富弘さんは今後天国で「ラーメン」と言っているかもしれない。



あの時の親父の小言ナスの花  
今年も裏庭の「やっちゃん農園」でナスの苗を二本育てています。二本あれば夫婦二人でひと夏はナスを買わず間に合います。「親の小言となすびの花は千にひとつの無駄もない」と言われるほど、咲いた花の数と同じだけナスが収穫できます。ナスの花はどれも全て下を向いて咲いています。子供の頃、親父の小言を下を向いて神妙に聞いていたふりをしていた自分の姿と重なります。今にして思うと、聞いたふりを少しは聴いていたのかもしれない。あの時の親父の小言を懐かしく思い出せる年齢になってきました。



虹の架橋検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百四十八号は令和六年八月一日(木)発行予定です。

靖ちゃんの似顔絵提供：ひさかさん